



YUICHI

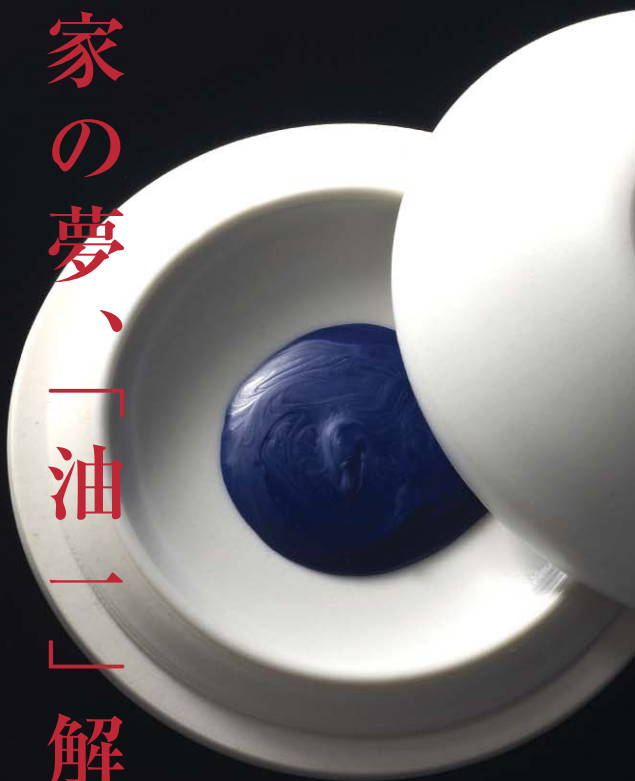


グッドデザイン賞受賞
コミュニケーション部門



油一

画家の夢、「油一」解禁。

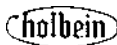


本瑠璃

東京藝術大学(当時、東京美術学校)の西洋画科教授だった黒田清輝が目指した独自の油絵具づくりの夢が、世紀を超えてリレーされ、大きな実を結びました。2008年5月、藝大の油絵具の研究と画家の感性、ホルベインの高度な技術力のコラボレーション(産学共同プロジェクト「理想的な油絵具の研究」)から誕生した油絵具「油一/YUICHI」解禁、全国発売されます。東京藝術大学が新たな製法によりラピスラズリの原石から顔料を抽出した高彩度・美粒子の水彩絵具「本瑠璃」(限定200個)も「油一」解禁を記念して特別頒布します。「油一」は日本の、世界の油彩画、水彩画のあり方を変えます。●「油一/YUICHI」30色セット131,250円(税込)●「本瑠璃」(4.2g)50,400円(税込)



ホルベイン工業株式会社
東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03 (3983) 9251
大阪府東大阪市上小阪1-3-20 TEL.06 (6723) 1555
www.holbein-works.co.jp



井出創太郎

日本人の記憶をうつし出す装置として

中井康之=文

Text by Yasuyuki Nakai



愛知県立芸術大学で非常勤講師を2年務めたあと、1994年に東京・東大和の長屋建ての倉庫を借りてアトリエにした。大学生の頃からの親友、額田宣彦とはここでも隣同士だった

I994

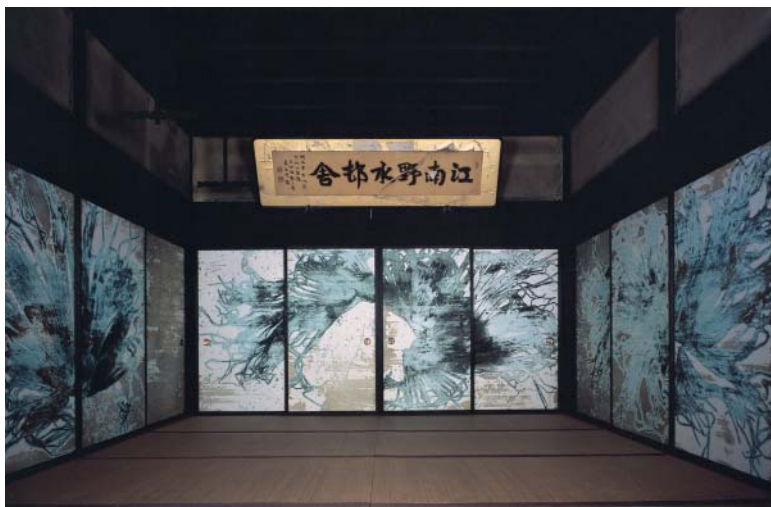
「作品の形式だけではなく、内容もエッチングなんです。腐食して版をつくる作業が、記憶や時間と結びつきます」

piacer d'amor bush P.M.6.05:01
1992 雁皮紙にインク、緑青
150 x 80cm 作家蔵

インタビューを通じて、初めて気づいたのだが、私はまた井出創太郎の作品と出合っていない。これは、井出が自らの作品を通して実現しようとしている現場に立ち会う機会がなかったというようなレトリカルな意味だけではない。記憶しているだけでも、1996年の「絵画の方向96」（大阪府立現代美術センター）、あるいは2003年の「平行芸術展」（小原流会館、東京）という、版の問題を取り扱っていない展覧会において井出の作品と向き合ってきたはずであったが、観者である私自身が「版画概念の拡大」という必要のない知識に囚われ、違うものを見ようとしていたのである。

また、井出自身が日本の戦後版画と遭遇していない。もちろん井出は現在、愛知県立芸術大学で版画を教えているので、これもレトリックに過ぎないといわれるかもしれない。しかしながら、大学で表現することを問いかけること

2006 「他者の記憶に寄り添っていく。それを物象化したものとして、銅版画がそこにあるんです」



愛媛・松山の古民家「渡部家邸宅」(重要文化財)でのインスタレーション 2005 撮影 = 北村徹

をモチーフにして作品をつくりました。タイトルは《placer d'armor bush》。音楽教師をしていた母がよく歌っていた《placer d'armor (愛の悦び) に bush (茂み) を掛け合わせました。そのタイトルは記憶の象徴として、今でも僕の作品に生きています」。

3年生になり、版画教室が通年で使えるようになってからも、版の技術的な指導者はいなかった。非常勤として中林忠良などが集中講義を行うような機会があったものの、基本的には版画技法のテキストを手がかりに手探りで進んでいた。しかしながら、このようなアナキーな状態から井出の最初のスタイルが生まれるのである。

「作品にある緑色の部分は、緑青を刷りつけています。本来、複数性(複製可能な)という版の特色を考えたとき、緑青が銅版にあるというのは版に対する破壊行為です。腐食した後にきれいに洗い流し、処理をすれば緑青は出ま

せん。なんとなくやって、たまたまできたんです」。

そのような意味でも、井出の銅版に見られる緑色の紋様は、非版画的表現ともいえるだろう。これはいわゆるモノタイプとか、あるいは版画技法の探究でもなく、版に対する破壊的表現なのである。加えて、版面はエッチングによって凹凸が付いているが、インクは油性と水性で構成され、版の状態としてはリトグラフのようになり、結果的に技法の混淆も導き出していた。

井出は近年、家屋という現場で作品を発表している。しかも重要文化財として指定されているような歴史的建造物で行われることが多い。井出がそのような場所ですべて発表を続けるようになったのは、秋葉原の駅近くに残った一軒の民家で仲間数人で行った展覧会「旅籠町プロジェクト」の経験が大きく影響したようだ。最後の住人が生活していた状態のままに、形式



「旅籠町 町屋プロジェクト (東京・秋葉原)
インスタレーション 2000 撮影 = 幸田森

1997

「時間的なもの、記憶を
形にしたいと思っていました。
《piacer d'amor》というのは、
幼い頃の記憶です」



piacer d'amor bush 97works-1
1997 雁皮紙にインク、緑青 150 x 80cm 作家蔵

はしていても、いわゆる版画技法を教えることを主要な目的にはしていない、と述べるのである。井出を、このような自由な立場に置かせているのには、彼の出身も由来している。父が画家であり、彼自身も小さい頃から絵描きになることを信じていた。受験のために研究所に通っていた頃も、周囲

の者から親の反対を押し切って美術をやっている、というような話を聞いても違和感を持ってはいたらしい。

しかしながら、彼にも当然のように、「他者」が訪れる。穏やかな浪人時代を経て愛知芸大に入学し、最初の課題で「躰」のである。井出はアトリエのドアを開け、石膏像が並んだ光景を見ると同時にドアをパタリと閉めて、2年間一度もアトリエで絵を描かなかつた。井出は、表現することの自由を取り戻そうと、研究所時代に経験したエッチングを試みようとするが、設備の不備などの理由で阻害された。その頃、偶然にも愛知県立美術館で開かれていた「棟方志功展」に出合い、その大きな画面と白黒という単色によってこれほどに豊かな表現ができるのかと純粹に感銘を受け、木版という原始的な版画に挑んだ。「下宿に雑草がどンドン生えるままにした庭があつたんです。それ



応仁の乱で焼失したこともある古刹、大阪・東粉浜の成等山正覚寺。3年後、その本堂、庫裡などの襖 26枚(作品数は36枚)、障子18本、明かり取り障子9本、本堂壁面(全体)などに銅版画を宿す予定。ギャルリ プチポアで、実際に使われる予定の作品の一部が展示された
Photo by Kenji Morita



としては襖絵のようになつた井出の作品が、寄り添うかたちで家屋の中に入り込んでいった。井出は、銅版は腐食液によって加速された時間を通過しながらできあがるものであり、それは人が住んでいる時間や記憶を内包している家屋と対話する力を持つことに気づいたのだという。

その後、世界遺産にされている五箇山相倉集落(富山)で同様のプロジェクトを立ち上げる。その実現のために、住民や役場の人たちへの説明から始まり、相互に理解を深めながら、集落の歴史や風習などが、見えないかたちで作品に浸透していったのである。現在、井出は、松山市郊外にある旧庄屋「渡部家住宅」を舞台にプロジェクトを展開している。その展示風景を写真で見ると、昔の日本家屋が持つている美しい世界に井出の作品が順応している光景をまざまざと思い浮かべられる。そして、井出の作品は、日本人が培っ

てきた光や陰に対する感性のよなものを、再度写し出す装置としてそこに存在しているのである。さらには、今さらながらに美術的なものが生活の中に一体化していた、日本人の歴史性といったものまで思い起こさせるだろう。見方によっては、実に危険なプロジェクトである。

なかい・やすゆき 国立国際美術館主任
研究員「3月24日、大阪のギャルリプチ
ポアにて取材

いで・そうたるう

1966年東京生まれ。愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了。94年「現代の版画」展(渋谷区立松濤美術館、東京)、97年「版 / 写すこと / の試み」展(富山県立近代美術館)を経て、99年、神谷伝兵衛稲毛別邸(千葉県稲毛市)において襖に銅版画作品を表具して展示。翌2000年、秋葉原で「旅籠町 町屋プロジェクト」(千代田区外神田)、01年「相倉 / その光と襖」展(世界遺産合掌造集落、富山県平村)を展開。06年、愛媛県松山市の重要文化財「渡部家住宅」公開活用事業に着手(09年に最終発表予定)。また「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」では高浜利也とのコラボレーション(小出の家)を制作。07年から粉浜(大阪)の正覚寺にてアート・プロジェクトを展開中。8月1日~10日には高浜とのコラボレーション「落石計画」展が、北海道根室市の旧落石無線局跡にて実施される。